

映画：ブレードランナー  
Blade Runner: A Movie

ウィリアム・S・バロウズ<sup>\*1</sup> 翻訳：山形浩生<sup>\*2</sup>

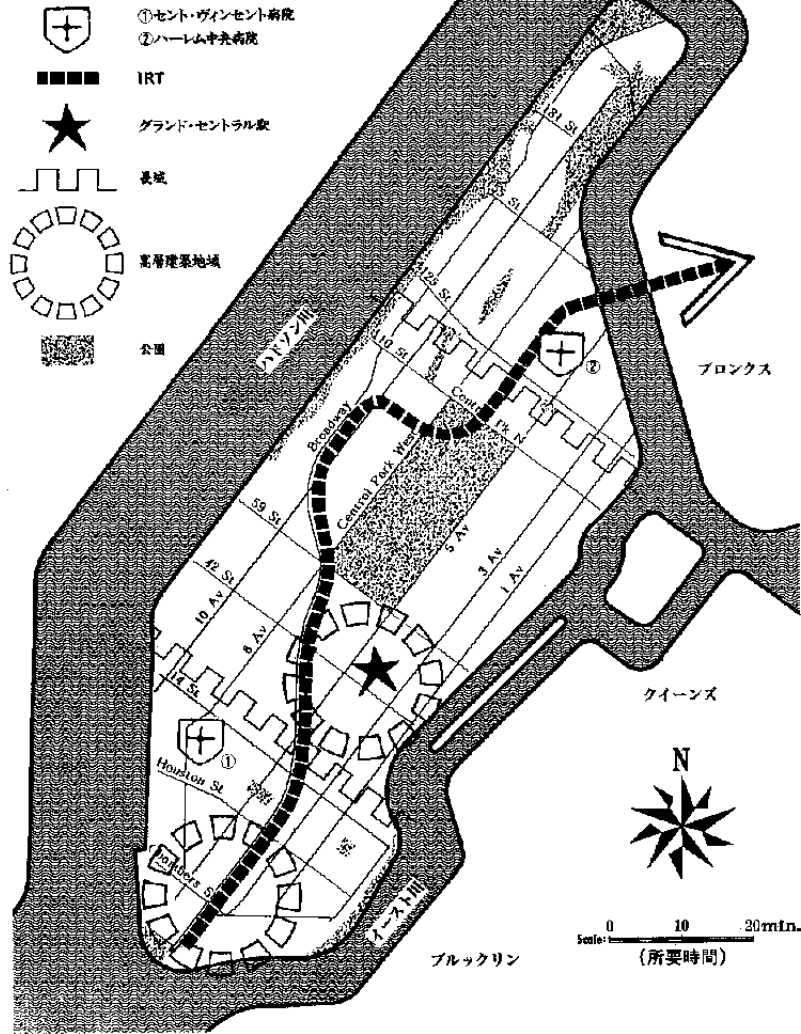
2002年1月1日

<sup>\*1</sup> ©1979, 1986 William S. Burroughs

<sup>\*2</sup> ©1990 山形浩生 <http://www.post1.com/home/hiyori13/>

本書の登場人物および設定は、アラン・E・ナース著「ブレードランナー」に基づいたものである。アラン・E・ナース氏に感謝する。

### マンハッタン2014年



# 目次

第I部 映画：ブレードランナー	3
第II部 訳者あとがき	53



## 第1部

映画：ブレードランナー



なんだと、B・J、こいつが何の映画か一言で説明しろってのか、このオレに？ だから言っただろうが、一言で言うには話がでかすぎるんだって 他人事じゃねえしよ。はやい話が、まずおれたちの持ちっやいねえ国民健康保険の話だ。身分も稼ぎも中級グループの、取り柄もないジョー君のお話だ。この坊や、年収一五、〇〇〇ドルを仕事掛け持ちで汗水たらして稼いでみると、国税庁が掛け持ち分のオアシを絞りとって、そいつでクロンボやメキシコ系の連中を福祉だ医療保障だって養ってやるから、連中は坊やの婆あさんを絞めたり妹を強姦したり十歳の息子のカマを掘ったりできるほど元気が残ってるってわけ。それでこの一五のジョー君のほうは、国税庁が仕事を終えてひきあげてみると、銀行にいくら残ってるか。ゼロ以下。こんなで一日三百ドルの病院のベッドに手が届くと思うか？

福祉と医療保障をもらってるパイ人が、メルセデス・ベンツの窓から身を乗り出してジョー君につばを吐きかける……「オレはこんなものために税金はらってるのか？」

「人種差別発言には気をつけませんとな」

「まあ、そういう感じかたをする方もおいででしょうな。氷山の一角ですよ。ファシズムは最後にはアメリカン・ドリームに打倒されるのです」

こいつは人口過剰と、広汎なサービス行政での官僚主義の発達についての映画だ。食品医薬品局FDAだのアメリカ医薬協会AMAだの大製薬会社だのは、市民側にしてみりゃタコみたいなものだ。あんたが癌で死にかけてるとするだろ。医者がまるで見込みはないよ、即刻診察室から出ていってくれとか言うのも、あんたは健康保険も持ってねえし、医療保障の適用も受けられねえからだ。医者がくれるのはケチな精神安定剤の処方箋だけ。死にかけた癌患者に精神安定剤なんぞをよこすようなヤブは、みんな犬猫病院のおまる係にでも蹴落としちまうがいい。

で、あんたは自分の癌の大將をなんとかしたい、と。いろいろと聞いてはいる。ラエトリルとか、ライヒのオルゴン集積器とか、フランスの医者で磁石を使った機械を用いるやつとか、フランスの別の医者でシャガス病（眠り病）接種で癌を治したやつとか、ルーマニアの……。こういう療法をちょっと試せないか？ 冗談キツイぜ。FDAはそんなものを出回らせやしない やつら、ライヒの著作すら破壊したほどだ。それじゃ聞くが、自分の末期癌にラエトリルを使うかとか、オルゴン集積器を使うかとか決めるのはいったい誰だ？ オレかFDAか。なんのかの言っても、死にかけてるのはオレなんだぜ。



これのどこが自由だ？ これでアメリカの看板あげておけるか？

てなわけで、アメリカは地下に潜る。めいめいが自分の薬をガレージや地下室やロフトやなんかでつくって、それぞれ独自のサービスを提供する。「医者はいらない」このマニュアルが、誰のポケットにもある。ガキはみんな、学校で注射のやりかたを教わる。らい病だとか梅毒だとか、チフス熱、マラリア、赤痢だとかいった大したことない病気には医者なんかいない。医薬品さえ手に入ればいいのだ。

これだとか他の病気の苦痛や不快感を緩和するために、アヘンチンキの健全な一服が八時間おきに処方され、それでも残った不快がひどいようなら補助的にモルヒネの注射が補われる。適量のアヘン類で得られる多幸症と安堵感は、病気を和らげるものの一つだからだ。この神の<sup>GOM</sup>霊薬は、あらゆる薬箱に常備されるべし。鍵はママが首にかけて持っている。ごらん、サタデー・イブニング・ポスト誌の表紙で、ママがそいつに手を伸ばしている。

こいつはアメリカについての映画だ。かつてアメリカが何であったか、今のアメリカがどう在り得るのか、アメリカン・ドリームの息の根を止めようとするやつらがいかにして打倒されるかの映画だ。自由市場により良い製品を出せば、優れた製品のほうが売れるのだ、と教わってきた。さてあんたは、一度のんだら効き目が七年持続するアマゾン産の避妊ピルと、ロフトの研究室を持ってるわけだ。こいつででっかい薬企業カルテルどもをビル市場から追い出そうってえと、FDAからOKがもらえるかな？ 長生きするぜ。この映画だと奴らのOKなんかいない。薬は地下に潜ったんだ。そしてアングラ薬品が世界を惨事から救うんだ。

こいつは癌についての映画で、これは強烈な対象だ。もうすでに医者たちは伝染病としての癌を話題にしている。この映画では、伝染病である閃光癌の病原体が、B23ウィルスでくい止められる。生物学的突然変異によるウィルスで人類を太古の健康状態に戻すウィルスなのだ。

こいつは、我々におなじみの愛しい<sup>みやこ</sup>都、あらゆる都市を代表するに至った都市についての映画だ。二〇一四年、ニューヨークはアングラ薬品のメッカであり、この世がかつて目にした一番豪華で、一番危険で、一番エキゾチックで生き生きしてぶっとんだ都市である。唯一の公共輸送機関は、明かりの暗いトンネル内を時速十キロでヨタヨタ走る、昔ながらのIRTだけ。ほかの路線は遺棄されている。手こぎの車や蒸気駆動車が製品を

輸送し、駅は市場に転用されている。深い地下鉄トンネルは浸水して、地下版ベネチアがうまれつつある。

遺棄された摩天楼の上層部は、暴動以来エレベーターがとまっているため、ハングライダーやオートジャイロの一味、登山家、尖塔職人たちに占拠されている。大空少年は、ペントハウスからガイド・ワイヤ式のパラシュートで飛びおりて、通りに着地する。そのパラシュートは、手動のウィンチや滑車、あるいはデルコ・モーターで回収される。(大空少年たちは、都市南部の電気供給の覇権をめぐって地下の連中と競合している)。あるいは大空少年なら、ケーブル式のすべり台を使ってもいい。荷台の下にジャンプ・シートを吊るしてそれに乗り、中継プラットホームからプラットホームへとジグザグに降りてゆく。または自分のハングライダーで屋根から屋根へと飛んでいってもいいし、オートジャイロ・パラシュートを使ってもいい。ビルはつり橋やプラットホームの迷路、キャットウォーク、すべり台、昇降機などで結ばれている。こうしたビルの中には、数百キロ程度を運ぶ軽量エレベーターが設置された。

一九八四年の暴動の折り、誰か冗談屋がニューヨークの水系に、水族館のありとあらゆる魚、あらゆる爬虫類やアシナシトカゲをぶちまけた。そして今では、淡水サメがハドソン河を泳ぎまわっている。アナコンダやアリゲーター、ピラニア、デンキウナギが地下鉄トンネルや沼、運河にはびこり、ときどき水泳プールや風呂、便器の中などに出現する。ありとあらゆる動物園の動物も放たれた。そして殺人熊が今ではセントラル・パークを徘徊している。三番街の人喰いヒョウは、喰われかけたおかまをエサにして、樹林管理用ジープからようやく射殺された。その他の動物は共存の方向で落ち着き、ジャッカルやオオカミ、キツネ、ハイエナは数多い野犬の群れと交尾している。

この映画をめぐる背景はこんなものだ。どんな治療も、どんな薬も、どんな色事も、ここでは金次第で手に入る。

こいつはブレードランナーのビリー、そして全人類にとっての二度目のチャンスについての映画だ。なぜならこのウィルスは時間に穴をあけるからで、ビリーは過去に踏み込む。そしてそれは未来でもある。

こいつは医薬の将来とヒトの将来についての映画だ。死んだ過去を脱ぎ捨てて、自らの存在の地下を吸収しないかぎり、ヒトに未来はありえないからだ。しまいには、アングラ医薬と体制側の医薬とは入り混じるだろうし、これは両者とも大いにためになるはずだ。

医師免許を持たない大量の訓練済み治療士は医者負担を大きく軽減するし、医療費も大きく下がるはずだ。実験段階の薬や治療法は、現代の研究室の機器や施設をすべて利用できる。医者は、西洋医学に加えて、鍼やあんま、薬草療法など、東洋医術のあらゆる手法を学ぶ。新しい医学分野が生まれる。予防医療……「病気にかかったら医者のほうが金を出します」。予防医師たちは、患者を周囲の全環境とのかかわりで機能している器官として考えるように教わる。そうした器官はどんな病にかかりうるか？ そうした病を発病のずっと前に防ぐにはどうすればいいか。コンピュータ化されるどころか、診断は芸術となる。ある医師は嗅覚だけで診断が下せる。

医者はクンクン嗅ぐ。そして恐ろしい笑みをうかべてかぶりをふる。

「君は検死官のほうにまわすことになる」

別の医者は、病気を嗅ぎ出す犬に頼る。犬はクンクン嗅いで、のけぞって吠える。初期の腫瘍の場合、歯をむき出しにして険悪になる。

若い魅力的な医者は診断法として性的接触を使う。心霊写真や声紋、筆跡分析はごく普通の手続きだ。

さて、見本のショットをお目につけようか。

彼はトランプの束のようにスチル写真をばらばら繰る……

シーンはマンハッタン南部、二〇一四年。背景となる情報をどうやってスクリーン上に示すかという問題は残る。一九三〇年代にある博識な脚本家がいて、一九六〇年代を舞台にしたストーリーを書いたと仮定せよ。その脚本家は、第二次世界大戦のことも、原爆も、ベトナム戦争、麻薬問題、インフレ、ロック・スター、ゲイ・リブ、ウーマン・リブ、黒人解放運動のブラック・パンサー党のことも知っている。どうすれば、具体的にスクリーンに写し出されるものを使って、一九三〇年代に生きる人々に対し、一九六〇年の背景を、一九六〇年に生きる人々にとっては常識であるような事柄を、なじませてゆくことができるか。もちろん、誰かが観客の世界とスクリーン上の世界とを隔てる重要事項を、簡単に要約して説明することもできよう。だが、これはぶざまなやりくちだ。そんなナレーターは、木で鼻をくくったような、ありそうもない仕掛けだ。

どうすれば、スクリーンに登場する人々の台詞や体験、行動のみで背景を示せるだろう。テレビで第二次大戦の映画をやっていたり、床屋の払いが三ドルだったり、テレビで原爆から二十年の特別番組、皿洗いが週給九十ドルもらう、麻薬捜査官がポップ・スターを逮捕、テレビでベトナム報道、デモ、記憶のフラッシュバック。観客は時代の見取り図を少しずつ細切れに飲みこんでゆく。

さて、とりあえずは一九九九年の背景をナレーションで示そう……



# ヘリコプターからのマンハッタン 俯瞰.....

「人口過剰は、個々の市民に対する政府の管理をますます増大させるにいたりました。それも古い形の、警察国家型の弾圧や脅しによる管理ではなく、仕事やクレジット、住宅、退職手当、医療などを使って、このようなサービスを差し止めることによる管理です。こうしたサービスはコンピュータ化されています。背番号がなければサービスもなし。しかし、これによって生まれたのは、ジョージ・オーウェルなどの線型な予言者が仮定したような、洗脳され、画一化された人間ユニットではありませんでした。逆に、人口の相当数が地下に潜ることを余儀なくされたのです。その数は誰にもわかっていません。この人々は、ナンバーを持たない、まさに無数の人々なのです」

新生児が泣き叫ぶ。敷地の細分化、住宅供給プロジェクトが拡大。コンソリデーテッド・エジソン電力会社、IRS、福祉、医療、健康保険でコンピュータがうなる。書式、通知、請求書があふれ出す。

激怒した市民が、スーツケース一つだけ荷作りして、レーヴィットタウンの自宅から歩み去る。落ち葉を熊手でかき集め、てっぺんに書類の束をのせて、火をつける。通りの向かいの老婆が電話にかけよる。パトカーが来て、落ち葉を燃やした罪で召喚状を渡す。パトカーが走り去ると、男は召喚状を灰の中に落とす。スーツケースを持って立ち去る。

二十三番街沿いに、ハドソン河とイースト河に向かって走る長城の空撮.....

「長城が築かれたのは、一九八四年健康法暴動の後でした。命令があり次第、半時間以内で、市の南部は切り離され、軍部隊が長城の配置につきます。同じような壁がハーレムを中央マンハッタンから切り離しています……」

ヘリコプター南下……石くず、荒廃した建物、空き地。空爆後のロンドンのようだ。再建の痕跡は、散在する応急措置を除いてほとんどなし。街路の多くは廃棄物でふさがれ、明らかに通行不能。ここかしこの空き地に、青空市場や野菜畑。ごったがえしたところもあれば、文字通り無人のところもある。ごったがえしていた広場や通りが、ことさら理由も見当たらないのに、唐突に空っぽになる。河には即席の舟が浮かび、製品を山と積んでいる。

「一九八〇年には、国民健康法を成立させようという圧力が増してきました。この法案は、それまで医薬業界のロビイングによって押しとどめられて来ました。そのような法律は、事実上、開業医の終わりを意味するし、総体としての医療サービスの質も低下する、と医者たちは反対したのです。そうでなくとも危うい状態の経済への負担も指摘されました。製薬会社は、価格統制によって利益が大幅に減るのを恐れ、提出された法案に反対して、ロビイングに何百万ドルも投じ、大新聞すべてに全面広告をうちました。そして、他のどこにも増して、健康保険会社は、このような法律は不要であり、税は増えてサービスは低下するという結果にしかない、とわめきたてたのです」

登場するのはボロ・アパートに住む中収入層の市民。雨漏りがして、この何週間ものあいだ、それを修理させようと手を尽くしている。大家は何もしてくれない。この市民、ちょうど、家族とドッグフードを一カン分けあったところ。

「わたしたちはここにいて、税金払って黒んぼやプエルト・リコ人やビートニクどもをホテルや病院で養ってやっている。連中の胸クソ悪いヤクの習慣に金を出し、不労所得をくれてやって、わたしたちと言えばどうだ。病院のベッドに一日五百ドル出せるか」

かれらの見付けたスポークスマンはパルシファル神父で、「番犬」として知られる新聞を出している。その連載四コマ漫画。

ブロンドの北欧系夫婦が病気の子供を病院に運ぶ。黒人の医者がそれを通りに放り出す。

「適用外のクズめ」

医者は、ケンカでこぶしを擦りむいたプエルト・リコ人の若者を迎え入れる。

「さあキミ、入りたまえ。看護婦、<sup>モルヒネ</sup>GOM 1 / 4 グレイン、こちらの紳士に頼む」





「一九八〇年、ヘロインが中毒者に対してのみ合法化されました。配給は、合衆国健康サービスの統括で、政府クリニックを通じておこなわれ、警察力と捜査官をふくむ複雑な官僚機構ができあがりましたが、ふたをあけると完全に腐敗しきっていたのです。中毒者でない人々が数多くこのプログラムに便乗して、自分の割り当て量を転売して何不自由のない暮らしをおくるようになりました」

また中流収入くんにおでまし願おう。痛くて麻痺するほどのヘルペスにかかってしまっている。往診一回で、医者に五十ドル払ったところだ。医者は、コデインの処方箋は書けないという。

「処方できるのはホワイトフィールド軟膏だけだね」

いっぽうにはでっかい幸せな福祉一家。ハーレムのドアを、どこでも叩いてみるといい。息子二人はヘロイン助成、娘はルイジアナ州カーヴィルの連邦ライ病院、もう一人は精薄でキングス・ステート、もう一人は筋ジストロフィー特別補助。ママはその全員のおかげを被っている。家計支持者減に対する補助金がでるのだ。絶職無憂。カラーテレビ。テーブルの上にはでっかい七面鳥の食い残し。ママは冬のカゼを避けるために好きな量の特製せきどめヘロイン・シロップを飲む。パパはストロベリー・アイスクリームを食べている。子供たちは床にねそべって旅行パンフレットを見ている。夏期治療でレキシントンにいこうか(「カントリー・クラブ」は、いまでは何マイルも続く森林や、ハイキング、乗馬、ゴルフ、テニス、ボート、釣りなどを患者たちに提供することで名をあげている)それともカーヴィルの姉さんを訪ねようか、決心がつかないでいるのだ。

パパがうめく。「たすけてくれ。アイスクリーム頭痛だ。坊ず、一発射ってくれ、急いで……ああ、ひいてゆく……」

医者は淫靡な笑みをうかべて少年にヘロイン処方箋をわたす……。

「さて、それを横流しして売りさばいたりしてつかまらんでくれよ」そして電話をとる。

「おい、婦長、カーヴィル行きでゴネてるやつらはどのくらいいるかね」

ハンセン氏病バクテリアの動きははやい。いまでは「白もの」でとおる。皮膚をひとかけ針でこそげて自分にこすりつければ、半年後には……。

あたらしいライ病患者が古い外輪式の河船から「埴生の宿」を歌いながらぞくぞくと出てくる。その他の連中が降りるのは、さびしい列車の待避線で、そこではカエルがいない……。

「ハンセン・ファミリーへようこそ。握手しようにも、私の手は想像するだけにしといてください……補助からおろされたくはないですからな。注意しとらんと、逮捕されて一般市民の生活に送りかえされちまいますんで。さて、私の扱ってるのはカーヴィル最高の白ものでして。ホワイトせんせの軟膏で、補助金暮らしを続けよう！」

バイユーや湖や川沿いには、ブーゲンビリアやバラや朝顔につつまれた小屋がならび、もの憂いライ病患者がまどろむ庭でとれた大麻や阿片を吸い、政府からのHを射ち、裏庭でオレンジやアボカドやマンゴーを育て、ナマズやバスやパーチを小屋のまへのポーチからつかまえたり、政府直営店からのカンヅメをあけたりしている。

カーヴィルは現在、東テキサスのグレート・チケットからフロリダのエヴァーグレイズまで広がる巨大な沼地地帯になっている。沼の島々では不気味な儀式が執り行われている。アリゲーターの仮面をつけたはだかの若者たちが、アリゲーターの頭と山羊の脚をもったワニ山羊神の前で踊る。

カーヴィルは食肉火曜日。もの憂げな若い貴族が花舟に乗って漂ってゆく。片脚がひざで喰いちぎられ、迫りくる夕闇のなかで切り口が光っている。

放射性病原体だよ、キミ、とつてもシックだろう。スミレ色の沼で、エメラルド色の魚が月にむかって跳ねる。そしてこちらにはハッとするような若いライ病患者がクレオパトラの衣装を身につけ、きれいなマーク・アントニウスと舁に乗っている……。

そして全保護区域が金網で囲われ、警備されている。

「ではこれでカーヴィルの幸せな人々とお別れです。この方たちは、不幸な災難を内なる勇気と力の泉によって素晴らしい生きざまに変えたのです」

「オレはこんなもののために税金払ってんのかよ。おかまの乱交パーティーだのマリファナ注射だののために？」

「寛大なアメリカ政府が授けてくれた素晴らしい施設では、お前のように喰いぶちを枷がなくてはならんようなウンコたれのことなど考える必要がないのだよ。お前など、生まれ故郷の外便所に脱垂してしまうがいい」

マフィアの一員がキャデラックの窓から身をのりだして、納税者の顔にツバをはきかける。「テメー、働かなきゃ暮らせねえのかよ。そんなボロクズ顔にヤツバペッペだぜ」

そして、虫酸のはしる納税者のクズどもとなんか暮らしていけないと、勤労不適格を申請する若者も多い。

「あいつらにはものすごくイライラさせられるんで、とても働けません。勤労全面不適格と、ヘロイン助成を申請します」

「なりふり構わぬロビングと妨害工作によって、第三次国民健康法が上院で否決されたため、一九八四年に健康法暴動が勃発。ニューヨーク市だけで、推定五十万人の死者を生み、被害総額は数百万ドルにのぼります。他の都市でもこれに匹敵する被害が発生しました。アメリカ全土の死傷者合計は、一千万人弱にのぼります。皮肉なことに、この高い死亡率は、厳格な武器取り締まりによって暴動の発生を事前にくいとめようという政府の努力によるところが大きいと言われています。一九八二年の全国銃火器登録法によって、過去に犯罪歴や麻薬中毒歴、精神疾患、福祉保護をうけている者は、エアガンも含めたあらゆる種類のあらゆる銃火器所持・購入を禁止されました。このため、これに触れない中産階級が、他のどのグループにも増して大量の銃火器を所持する結果になったのでした。

ためこんだ武器と、警察や公安の共感を頼りに、『キリスト教パルシファルの兵士』は、ニューヨークを制圧して、少数民族やビートニク、ヤク中、おかまや長髪連中を皆殺しにする話をおおっぴらに始めました。おおっぴらすぎて、国際金融マンだのウォール街だの黄禍だのに対する物騒なほのめかしをばらまいたりもしたため、必要以上の人間をおびえさせる結果となりました。かれらの抹殺リストにはユダヤ人や金持ちや中国人も載っているのだろうか、というわけです。敢えて名を秘す有力者たち

は、パルシファル一派への有効な対策を講じておくのが賢いかもしれないと判断。とにかくいわゆる「悪魔の日記」なる文書が、名指しで脅かされている少数民族に対し即座に漏洩されました。

『悪魔の日記』は、一九六〇年代にCIAの命令で作成されたものです。どこの雑貨屋や日曜大工店ででも簡単に手に入る材料で、火薬や発火爆弾にとどまらず、各種生物兵器や化学兵器を製作するための詳しい手引書。カン入りブイヨン・スープからポツリヌス中毒を起こす方法。殺虫剤で神経ガスをつくる方法。塩素ガス、ニトログリセリン、NO<sub>x</sub>、ひ素ガスの作り方。こうした武器を、クロスボーや吹き矢、パチンコ、火薬式手りゅう弾などと併用することで、あの驚くべき数の死傷者を産んだわけです」

一九八四年八月六日……キリスト教パルシファルの兵士たちはセントラルパークに集結。警察が制止しなかったため、かれらは二列にわかれ、北と南へ行進していった。その後の戦闘は、「カスター將軍最後の突撃」のような続きものの絵になって記録されている。

## 十二丁目セント・ヴィンセント病院包囲戦

医者、看護婦、雑役夫が、メスやノコギリ、しびんで暴徒と戦う。エーテル爆弾が廊下で爆発、暴徒たちの動きが止まったスキに、医者が患者たちを洗濯物の投下口から安全なところへ逃がす。病院は炎上中。中国人の雑役夫が硝酸入りバットに銅を投げこみ、NO<sub>x</sub>を発生させる。これは遅効性の有毒ガスだ。吸いこんだ暴徒たちは、一、二時間後に倒れる。

## 海への行進

ヴィレッジを兵士たちが進む。司令官たちは一帯を掃討し、ロウアー・マンハッタンのロフトや倉庫や廃ビルに兵力を集中する。だが、ゲイ書店やアート・ギャラリー、酒屋の多くにはNO<sub>x</sub>ガスやヒ素ガス、ホスゲン、ポツリヌス菌のブービートラップが仕掛けられている。思いどおりのいけにえが見つからず、激怒してイラだった兵士たちは、八丁目以南の地域に突入するが、それまでに吸いこんだ数々の毒のために次々に倒れて死んでゆく。

屋上からは舗石の雨……パルシファルの兵たちはビルに駆けこむが、そこへ塩素ガスの雲が階段を下りてくる。火薬式手りゅう弾にガラスの破片や青酸ナトリウムをつめたものが、パチンコやクロスボーで撃ちこまれる。青酸やポツリヌス菌のダーツを使った無音の吹き矢。パルシファルの兵たちが、相手は正々堂々と戦うつもりなんかまるでないんだと気がついた頃には、被害は著しいものになっている。続いてパルチザンたちが登場し、山刀や槍や剣で白兵戦を開始。死んだり死にかけの兵から火器を奪い、かれらは十字軍の背後にまわる。激しい十字砲火と、遅効性有毒ガスによる痛手のため、十字軍は湾に追いつくとされ、溺死者多数。生存者は散々にわかれて、聖なる十字軍としての使命を放棄し、ミッドタウン・マンハッタンの中流近隣住宅で強姦、強盗、殺人にはしる……

## ハーレム・ゼネラルの行進

こちらでも、キリスト教パルシファルの兵たちは、生物兵器や化学兵器による猛攻に会う。懲罰隊がクイーンズやブロンクスの白人中流近隣住宅をおびやかしてまわる。戦闘は果てしなく続く。電気は切られる。上水道にはLSD。ニューヨークは飢えている。食料調達部隊が郊外や田舎に広がってゆく。

連邦軍と疲労、飢え、病気、国民健康法成立の公約と全暴徒の無条件釈放により、やっと秩序が回復する。「一千万のアメリカ人が死んだというのに、いまさら正義を云々してどうなる。今は忘れて再建に力を注ぐしかあるまい」と大統領。

ニューヨークは核攻撃のあとのようだ。あたり一帯は廃墟と化し、難民キャンプやテント村だらけ。街を見捨てた数百万人は戻ってこない。ニューヨークはゴーストタウンだ。他の都市も同じような状況。

カーヴィルのライ病患者たちも、かれらなりの働きをみせ、即席の武器を使って沼地で戦闘をくりひろげた。ライ病に感染したアルマジロを何千匹も放ち、その結果、増大の一途をたどるハンセン・ファミリーは、また新たな転向者を大量に迎えることとなる。いまやカーヴィルはルイジアナ、ミシシッピ、フロリダ、東テキサス、ミズーリ、アーカンサスに広がる沼地や森林一帯に広がっている。広大な郊外スラムと化した、この地が気に入って住んでいる非ライ病患者たちも多い。

大統領は国民健康法にサイン、無料医療サービスが全アメリカ国民および居住者にまで適用されることになる。医者や看護婦や雑役夫たちが、病院や病棟や手術室を踊りまわって歌う：

我々は万人のもの、  
人生最高のものがみんなタダ……

心臓モニターがピッピッ、人工肝臓がゴロゴロ、レントゲンがカチカチ、鉄の人工肺がヒューヒュー……

我々は万人のもの、  
人生最高のものがみんなタダ……

健康法はやがて、解決するよりも多くの問題を引き起こしはじめる。老化を防ぐ薬のため、平均寿命は百二十五才になり、人口問題が深刻化。一方、これまで消滅したと思われていた病気が、伝染病となって爆発。一九八〇年後半に発生したおそろしい成人ジフテリアなどがその例だ。人々は、強力な抗生物質に頼りきるようになって、自然抵抗力を完全に失い、こうした病原菌に対して、白人にはじめて出会ったインディアンや南洋諸島人のように無力になってしまったのだ。

「まったく未知の疫病が、すでに過密状態の病院にさらに数百万人を送りこむ危険があります」とある衛生官は警告する。

糖尿病やフリードリッヒ氏運動失調症、ハンチントン氏舞蹈病など、遺伝性で退行性の病気の患者の寿命ものび、今や百才を越えても子供がつかれるようになったため、劣等遺伝子が国中にあふれる。

あらわになってきた問題をはっきり指摘したのは、おとなしい大麻吸いの生物数学教授ハインツだった。「現代薬学の奇跡は、自然の免疫機構に介入することで、長期的に見ると予防するより多くの病を生みだすことになる。かつては幼児期あるいは小児期に死亡していた遺伝性疾患の持ち主は、現在ではいくらでも寿命を引き伸ばすことができるため、遺伝的に欠陥のある子孫をいくらでも残せることになる」

そしてかれは、長期的な生物学的視点から見て、生存価値の著しく低い、最悪の形質を持った人類で地球はあふれかえり、とりかえしのつかないことになるだろう、と結論づけた。

この予測はコンピュータで検証された。あと百年で、終身治療の必要な致命的な遺伝疾患に苦しむ患者数が人口の多くを占めるようになる。その看護を行うだけの健常者が足りなくなる。疫病によって、種の弱体化と退行はさらに進行するだろう。議員たちは仰天して、議会では自主的断種へのインセンティブづくりが議論されはじめた。

しかし、国民健康法修正条項（俗に言うH A A）に盛りこまれたインセンティブは、罰則型のものだった。不適格者は、去勢に同意しないかぎり、どんな医療サービスも受けられない。そして「不適格性」は医者の委員会によって決定され、あいまいに「生物学的に



望ましくないあらゆる遺伝性の疾患、状態、傾向」とだけ定義されていた。たとえば黒んぼであるとか……インド人であるとか……おかまであるとか……ヤク中であるとか……気狂いであるとか……H A A、H A A、H A A。

また、修正条項は、すべての医者に、有料無料を問わず、個人治療を禁止した。代替治療手段が存在すると、H A Aの主旨が骨ぬきになってしまうからだ。大量虐殺にも等しい白人の陰謀に抗議して、何千人もの黒人やプエルトリコ人がセントラルパークで保健証を燃やした。そうしたのはかれらだけではなかった。だが、この集団保健証焼き集会は暴動には到らなかった。

ハインツ教授の結論が正しいとすれば、H A Aはまったく論理的だ。医療が、免疫を弱めることで病気を増す結果になり、同時に遺伝的欠陥に苦しむ人々を生き永らえさせてしまうなら、そうした個体を遺伝子プールから取り除いてしかるべきところから人口を間引いていくのは正しように思える。

H A Aが施行された一九九九年、薬は地下に潜った。医療品の動きが活発になり、まず一九八四年暴動で貯めこまれた薬品が流れ、続いてロフトや地下室や廃棄された地下鉄のトンネルに出来た何百もの闇研究所が供給を開始。医者のおほとんども、闇診療を行っていた。

二〇一四年のニューヨークは、再建されたというよりは再入植されたといったほうがいくらいだ。公共サービスはほとんどない。動いている地下鉄は一路線のみ。うち捨てられたトンネルには電力ギャングや秘密研究所、ドブネズミに野犬がいて、錆びた改札ごとに通行人にうなっては咬みつこうとする。侵入者を追い払うために、トンネル内の住人たちがエサをやっている。地下鉄の王として知られる謎の人物は、その本拠地をクイーンズ・プラザに置いている。地下鉄列車、トークン売り場、回転式改札などによる目のくらむような建築で、その一部はいつも動いている。夕食には夕食列車に乗り、下りるとそこは北カーヴィル出張所で、カエルの鳴くニュージャージーの沼地、といった具合。

いたるところに菜園がある 屋上、空き地、テラスに地下室。暴動以来、クズでとうせんぼされた通りも多い。道路の穴は広げられて、養魚池に使われている。ガソリン不足のため、トラックにかわって水上輸送を復活させようと、ロウアー・マンハッタンに運河をつくるプロジェクトが持ち上がった。だが、完成はしなかった。運河は、錆びた錠と機械の山で行きどまりになる。遺棄された運河沿いの住宅が人気をよんでいるが、中には湿気と霧に耐えられない者もいる。魚が戻ってきた……

ミキサー車で釣りをしている少年が、二キロのスズキを釣りあげる。魚を手を持ったまま、少年は石敷きの埠頭に向かう。

「デッカイのがあるよ。お買いドク。二十ドル？ お目当てなに？ クスリのんで二百年生きたいの？ 南京豆いっぱい？ ちんぽこすげ替えたい？ 赤ん坊多すぎ？ 七年避妊薬ならあるよ」

ロウアー・マンハッタンはアングラ医療の世界の中心となっている。どんな薬、手術、治療であっても、ここなら金次第で手に入る。トンネルや運河、廃ビル、ロフト、地下室の迷路には、サービス国家からのありとあらゆる逃亡者やアウトローが住んでいる。ここ、ポップストリートでは、脳薬ポップが買える モルヒネの五十倍も強力で、はじめは中毒性でないと考えられていたが、のちにこれが誤りと判明。ポップは中毒者を運動停止状態にする。新陳代謝がほとんどゼロになり、凍結が融けると再冷凍肉のように腐りきってしまう。凍ったままであるため、中毒者はたえずポップの供給が必要となる。

ほら、電気カヌーに乗ったポップ屋が来る。カヌーは、暗い水面と倉庫の窓に溶けこむ

ように、全体をいぶし銀に塗ってある……言うまでもなく、このクスリの製造販売は違法だ。

精液の闇市場の出現は、長期にわたる遺伝子戦争を予告するものだ。

「男の子の精液どう？」

ロック・スターや映画俳優が、アングラ精液銀行に精液を売る。精液売買は重罪だが、逮捕される精液屋やアングラ医者はずかだし、有罪となる者はもっと少ない。明らかに、健康捜査員たちは袖の下をとって、見て見ぬふりをしているのだ。

ロウアー・マンハッタン、二〇一四年。合法的なやりかたではいくら出しても手に入らない手術、薬品、治療を求めて客がやってくる……長期的な利益を維持しようという製薬会社の思惑で、国の官僚機構から許可の出ない薬品など。麻薬中毒の治療法としてのアポモルヒネは、ヘロイン産業と麻薬取締り機関によって弾圧されている。ヘロイン解禁以後は、できるだけ多くの中毒者をヘロイン配布プログラムの下において、人員や予算を確保したいという狙いのためだ。製薬会社も、厚生官僚も、これほど便利な問題を解決するつもりなんかまるでない。

一九五六年、アマゾンのインディオが開発した避妊薬がアメリカの製薬会社に提出され、試験と、結果次第では販売も行うことになった。一回の投薬で、七年間妊娠が避けられる。別の薬を与えると、受胎可能になる。人口過剰がかつてない大問題となっている今、人口制御のための精密な手法が手に入ったのだ。製薬会社はこの薬品を没にした。利益が下がるからというのだ。一日一錠のピルをいつまでも売っていたいんだから、七年も有効なピルの話なんか聞きたくもない、というわけ。薬は利益を理由に無視された。当然去勢官僚からも非合法とされたが、この薬も闇市場では手に入る。ロフトの薬品研究所は、長期的な考え方なんかしないからだ。

ベンチャー事業家、革新的技術家、奇想家、冒険家など、大製薬会社とFDAによって冷飯を喰わされていた連中が再び現れる。

アマゾンのジャングルの男が避妊ツル草を採集……地下室の研究所……街頭の売人……

「アマゾン薬どう？　すごくお買いドク……五〇〇ドル……」

むろん、まちがった薬が市場に流れてしまうというような遺憾な事故もあった……。

虫歯どめうがい薬を使った男の歯が一気に抜ける。

衛生状態や清潔さの水準があまりに低い地下研究所もあった……。

小便器を改造した不潔な実験室、培養器にゴキブリ……

それに目的に問題のある研究所も多かった。たとえば習慣性の異常に高いブルーなどの薬物をつくろうとしたり、生物兵器をつくろうとしたり。

アングラ医療に欠かせないのがブレードランナーだ。薬や器具、設備を、供給元から患者や医者やアングラ診療所に輸送するのがその役目だ。

アングラ研究所のなかには予算も人員も豊富なところもあった。そういうところがどんな研究をしているのか、下町の噂にすら流れてこなかった。たぶん、選択的に作用する疫病や、遺伝子操作の研究をしているのだろう。「去勢済ぐうたら問題への決定的な解決」だの、超人類のための青写真だのの話も聞かれる。

アングラ医者はみんなブレードランナーが必要だ。非合法手術用具や薬品の所持は、医者なら非合法診療の証拠となって重罪だが、一般市民なら大した罪にはならない。それにブレードランナーは、複雑な迷路状にいら組んだロウアー・マンハッタンのトンネル、小道、運河、滑走路、橋、キャットウォークをすべて熟知している。ブレードランナーはそのほとんどがティーンエイジャーで、逮捕されても未成年なのでそれほど厳しい刑は受けない。アングラ医者たちの活動を支えているのはブレードランナーたちだ。



# ブレードランナー

羽のついたヘルメスのサンダルを履き、医者かばんを持ったはだかの少年のフラッシュ・ショット。クレジット・タイトルのバックで、戸口から戸口へと身を隠しながら、ロウアー・マンハッタンの通りを走ってゆく少年が映る。吹きつける雪……廃ビルの窓から吠える犬。強い風に少年は身をかがめ、顔に雪がたまっている。しばらく倒れるように木にもれかかる。凍りついたトウモロコシのくきがある空き地を通りすぎる。走るうちに、天気は少しおさまってくる。カエルが道路の穴にとびこみ、枝のつまったドブや下草から雑草や茂みが生えてくる。もう、少年が何かから逃げているのは明らかとなる。その背後にチェーンソーの音。少年はつまづいて転び、ふりかえりざまに絶叫。おがくずを巻き上げながら、木が倒れかかってくる。

少年は、腰まではだかでベッドに起き上がる。夜明けの薄明かりの中で、となりに若い男が寝ているのがわかる。外では、エンジンの回転を上げるオートバイの音。ショーツ姿でベッドを出ると、まぶしそうに目を細めてブラインド越しに外をのぞく。青白い少年の顔に、淡い陽射し。頭上に警察のヘリコプター。オートバイは発進して、雪をまきあげながら角を曲がる。少年は窓を離れ、はなをすすりながら、てきぱきと部屋を調べはじめる。ラジエータの裏にあった。床板のあいだから、短い金属棒が潜望鏡のようにつきだしている。その先端には、輝く水晶玉のようなレンズ。装置の横には小さなおがくずの山。輝くツユの玉を先端にためた、勃起したペニスのフラッシュ・ショット。

眠そうな若者の声：「どうかした、ピリー？」

ピリーは唇に指をあてる。そして潜望鏡をのぞく仕草をしてみせて、耳をピクピクさせる。相棒の少年がベッドからタオルを投げてよこし、ピリーはそれを盗視聴器にかぶせる。そしてショーツの前をふくらませながら、ベッドに静かに向かう。ベッドのたもとで立ちどまり、ショーツを引っ張りおろすと、ちんぼこがジャックナイフのように飛び出し

て、ビリーは舌をならす。ショーツを肩ごしに蹴りとばし、立ったまま手を頭上でふり、大観衆の拍手にこたえるような動作をする。ロバーツは、シーツに身を投げ出し、勃起したままはだかで横たわり、片足は床について、よごれた足の裏をこっちに向けている。二人は見つめあってピクつく男根のリズムがだんだん同期してくる　ピクン、ピクン、ピクン　暗い部屋のなかで、心臓の鼓動がドラムのようなようだ。信号用ドラムと、ピッピッと鳴っている心電計のフラッシュ・ショット。ビリーはスローモーションでしりもちをついて脚を宙に浮かせ、足でばんざいをする、ロバーツがその股間で旋回、二人はスローモーションで水中演技を行う。ビリーはハマグリみたいのたくり、全身をピンクや紫や虹色に染め、そこでラジエータがゴロゴロチョロチョロガンガンと恐龍がセックスしているみたいな音をたてはじめ、ふたりはラジエータの効果音にのってはげみ、それにあわせて古いビルの基礎までゆるがすものすごい振動のコーラス。

外には崩れかけた石造建築の瓦礫。

速回しの着替えシーン。外では、ビルの一部が崩れ、道をふさいでいる。二人がそれを迂回したところで、野犬の群れが姿をあらわす。ビリーが腕をのばし、手の平を向けると、犬たちは壁につきあたってみたいに向きを変える　道をゆずり、一匹は背後で、最後に一声恐怖と嫌悪の鳴き声をあげる。

交差点で、粗野な若者でいっぱい車が二人の前にとびだし、ごっつい青年が身をのりだして叫ぶ。「クソおかまのブレードランナーめ！」　ビリーはサッとあたりを見回す。トラックが猛スピードで接近中。信号が変わりかけている。ビリーは叫ぶ……「てめえ、車を下りろ、このタコ尺八野郎め……」

急ブレーキ　トラックのクラクション　トラックは前の車の後部につっこみ、窓から人が投げ出され、ガソリンに引火して爆発し、靴が道のむこうまでふっとぶ。ビリーとロバーツは顔を見合わせ、野犬のように歯をむきだしにしてニタつく……。

二人は廃ビルの迷路の中をぬうように進み、とあるドアの鍵をあける。ここはブレードランナーの組合。長いテーブルのある、大きながらんとした部屋だ。

組合の壁には絵がたくさんかかっている。ほとんどは無名の画家の作品だ。暴動の最中に美術館や個人のコレクションから盗んできたものもある。「カスター将軍最後の突撃」「泳ぐ穴」、あるいは「水鼠」「きびしい現実」など古い写真の引き伸ばし、フォン・グロデン男爵の写真、十九世紀や二十世紀のニューヨークの写真。これらの写真や絵が、映画の

背景となる事柄の多くを伝える。

勃起して、サンダルとヘルメットにヘルメスの翼をつけた、はだかの少年の等身大の絵。けばけばしいピンクや青で描かれた絵で、手のこんだ金の額に入っている。背景は、ボッシュ風の燃える都市：

### ブレードランナー

ビリーとロバーツはこの絵の前に立って、コインを投げてどっちが夕飯をつくるか決める。ロバーツは古いアイスボックスからステーキを二枚取り出して、まきストーブで調理をはじめ。ビリーは歩きまわりながら絵をながめる。

(フラッシュバック、ビリーが麻薬中毒からぬけだそうとしているシーン。ロバーツが正気をたもてるだけのわずかな注射を与えている。とうとうビリーは、中毒から立ちなおって起きあがる。ロバーツは窓から外を指さす。「見るよ、ビリー。ひさしぶりだろう。空が青いぜ」 きれいな青い空と雲のショット、ブレードランナーの絵から)

## 人口禍

以前：湖上の小屋。少年が釣り糸をたれ、そのポケットからはリスがのぞき、あとからアライグマが続く。以後：安っぽい小屋が湖のまわりをびっしり囲み、酒場、ジュークボックス、騒々しい酔っぱらい、モーターボート、廃油、死んだ魚。

\*\*\*\*

「番犬」の連載マンガが、中流氏の苦境を描く：

\*\*\*\*



ロビストやフィクサーだらけのホテルの一室。床の真ん中に洗濯物のかご。

「わたくし、合併製薬の代表です」

「やあ、ぼくは健康保険社から来たんですけど」

「そのかごにいただくものをいただいてから、商談とまいりましょう」

新聞見出し「健康法案、上院で否決」

\*\*\*\*

初のヘロイン・クリニック、一九八二年十二月二十五日開業

ペイ中の行列が、「これが軍だよジョーンズさん」と「あんたはラッキー、スミスさん」のメロディーにあわせて行進。窓口に腕をつっこんで、注射をうける。

\*\*\*\*

海の男が荷袋をかついで厳しい表情を浮かべている一九四二年のポスター。

「オレは海軍に戻るぜ」

はだかのライ病患者が勃起して……「オレはカーヴィルに戻るぜ」

## 埴生の宿

もの憂いカーヴィルのショット。ライ病患者がたむろして、阿片や大麻を吸っている。かれらは移動式ヘロイン・クリニックのサービスを受けている。

\*\*\*\*

不思議な儀式……ワニヤギ神の前ではだか踊り……カーヴィルでマーディ・グラの仮装行列。

\*\*\*\*

「我々はこんなことのために税金を納めていのかね？」

福祉まかせの幸せな大家族……「ヘロイン補助の息子が二人」等々。

\*\*\*\*

帯状疱疹のできた中流氏が医者に行く……

「コデインですと？ 冗談じゃない。その手の治療はしない主義だね。ホワイトフィード軟膏の処方箋を書いてやろう。五十ドルいただきます」

演説するパルシファル神父……

落書き：黒んぼ、イタ公、スペイン野郎、おかま、ユダ公どもは皆殺し……。

「悪魔の日記」が出まわる。青酸ガスのつくりかたやガラス爆弾、神経ガス、ポツリヌス菌の製造法を示す図。

黒人たちが、殺虫剤スプレーを袋にいっぱい買って店を出る。店員たちは顔を見合わせる……。 「黒んぼどものところには、さぞかしムシが多いんだろうよ」

一九八四年八月六日……健康法暴動……セント・ヴィンセント病院包囲戦……ハーレム・ジェネラルの行進……

暴徒は動物園の動物を放つ。水族館の魚を川に放つ。

## カーヴィルへ参戦のよびかけ

ライ病患者が歌う：「あの小屋は我らが作った小屋。（実はプレハブ住宅……）」

あのトウモロコシは我らが植えたトウモロコシ。（けしにマリファナ……）」

のんだくれた英雄たちでいっぱい船が、毒をぬった吹き矢の待ちぶせ攻撃を受ける……

ハンセン病をばらまく……ライ病のアルマジロのおりが開放される……。

健康法の歌と踊り……

長寿薬……ドイツ人の医者がお手上げの格好をする。「Ach, Gott, こいつらは繁殖しすぎて、陸からはみだしてケツ穴まで海につかちまうぞ」

ハインツ教授が講義……「したがって結論はまちがえようがない。二十世紀の医学上の奇跡は、自然抵抗力を破壊して、病気を減らすかわりに増やしたわけです……一九九〇年代初期の致死性成人ジフテリアの発生……もっと恐ろしいのが、遺伝する退行性の病の発生件数です……こうした望ましくない遺伝子の慢延はどこまで続くのでしょうか？」

アインシュタンが、MをEにする方程式を書く。

ハインツが方式を黒板に書く。

広島。

健康法改正。

「要するに、これからはどんな医療サービスを受けるにも去勢が必要となるわけです」

アングラ医療.....ロウソクの明かりで手術する医者。即席の呼吸器、人工腎臓、鉄製人工心肺、ペースメーカー。

秘密研究所.....マッド・サイエンティスト：「この文化なら、世界を支配するのはわしらだ！」

絵にはそれぞれライブの映画がついていて、ビリーが目を向けると絵が動きはじめる。ロバーツはステーキにフレンチフライ、フラップジャックとビールを並べる。、ビリー、それをむさぼり喰う。

「ヤクをやめると腹がへってね」

別の部屋では、事故にあった患者が、即席の呼吸器で命をつなぎとめられている。信号ドラムがメッセージを伝え、さらに電話を経由してビリーの医者に伝えられる。メッセージが返送される。

ビリーとロバーツはオウム供給店に行って、臓器移植手術に必要な物資をそろえる。犬が地下鉄の改札から鼻ヅラをのぞかせる。パトカーが通る。二人はビルの戸口にとびこんで、誰かの名前を探すふりをする。

「オメーら白んぼが、ここで何してる」

「車をかわしてるんだ」

黒人の若者が二人、背後で道をふさぐ。

「おい、持ってない？」

ロバーツがヘロイン錠入りのびんを渡す。黒人はランナーを行かせてやる。

移植手術は、発電工場横の地下鉄指令室で行われる。発電機音はこのシーンの間中聞こえて、ときどきその音が不吉に途切れ、照明が暗くなる。設備はすべて自家製で、絶えず再調整といじくりまわしを必要とする。ビリーはザ・ハンドを呼びにいく。かれはこの業界最高の手術アシスタントである。改造トラックのヤサにいた。手製のピストルで、部屋の反対側のマッチに火をつけている。ザ・ハンドはブルー中毒。ブルーとはヘロインの金属性変種で、顔が青っぽくなるのでこういう名前がついた。ブルーはヘロインの二十倍も強力だ。ザ・ハンドは自分の道具箱をかついで、馴染みの仲間のきれいな青い目をした黒

いシャム猫をつまみあげる。

手術室では、<sup>ドク</sup>医者が手術の準備をしている。まずハッシシ抽出物をのんで、モルヒネを一本うつ。

「バカヤロー、麻酔屋はどこだ！」

麻酔士がぐでんぐでんに酔っぱらって千鳥足で登場。

「こいつ、呑んでくれてやがる。お前が代われ、ビリー」

「誰が呑んでくれてるって？」麻酔士はよろよろと手術台にもたれかかる。<sup>ドク</sup>医者はそれに背を向け、シリンジをペントタールナトリウムで満たす。

「お前だ。クビだ。出ていけ」

「バカヤロー、この能なしおかま軍団どもめ！」と麻酔士は叫ぶ……。「この際言ってるけどな」

<sup>ドク</sup>医者は振り向いて、シリンジの中身を麻酔士の開いた口に注ぎこむ。

「うるせーな、口の減らんヤツだ」

麻酔士はそれを飲み込み、のどをつまらせ、せきこみ、フラフラしてくずおれる。

「こいつをつまみ出せ」

みんな仕事にかかる。ザ・ハンドは冷静沈着、正確で手早い。別の患者が運びこまれる。別の医者が、犬を縄につけてつれている。ザ・ハンドのネコは毒気を吐きながら手術台にとびあがり、さらに<sup>ドク</sup>医者の頭にとびのる。

「バカヤロー、その犬っころを蹴り出せ！」と<sup>ドク</sup>医者は叫ぶ。犬は吠えながら連れだされる。さあ、ほかの医者たちも入ってきた。まるでマルクス兄弟のコメディーみたいなシーン。担架、二段ベッド、ハンモック、患者のひとりなど、五寸釘みたいな柱に垂直にくくりつけられている。みんな電線につまづき、ヤクをうち、コーヒーをいれ、サンドイッチを食べ、メスをふりまわしては助言をしあっている。

医者の一人在缶ビールを飲みながら、肩ごしにのぞきこむ……。「ぼくなら腎臓を短絡させるけどね」

「こんな状況で働けるものか」と<sup>ドク</sup>医者。ザ・ハンドが鍵を見せる。かれらはそっと担架を運びだし、中に入ろうとしている多数の患者たちの横を過ぎる。うつらうつらする医者たちや、懐中電灯のあかりで手術している医者も。鍵は、かつては重役専用便所だったところの鍵だ。気づかれずに患者をそこに運びこもうとするが、別の手術チームが割りこも

うとする。ようやくドアを閉め、鍵をかける。閉め出されたチームはパイプでドアをなぐりつけながら怒鳴る。「ここを開けねえか、こん畜生めが！」

「だまれ、患者にエンGRAMを生じさせる気が……」医師は怒鳴りかえず。やっとドアをたたくのがとまる。一同、設備のコンセントをいれて作業にかかる。極度に集中しているシーン……手術完了。ワイヤーガラスの天窓からさしこむ夜明けのあかりのなかで、ぼんやりと青白い顔……



この先、物語は二つの線をたどる。交互に見せてもいいし、二つのスクリーンで同時に見せてもいい。ここまで我々のたどってきたストーリーの線は、どんどん異様で夢みたいでエピソード的になってくる。もう一方のストーリーは、直線的に、未来を舞台に演じられ、それなりの枠内でリアルかつ筋が通っている（これは「ブレードランナー」の本からとったものだ）。

ビリーは手術のあとでうつらうつらしている。

夢の最初のシーケンスと、盗視聴器の発見が反復されるが、今回はアパートにたった一人。そのアパートも安普請で、壁も薄く、隣室の騒音が聞こえてくる。各階のホールはごったがえしている。外に一步ふみだすと、そこはごみごみした不潔なスラム。上空には警察のヘリコプター。

ビリーが目をさますと、そこはもとの地下鉄指令室で、天窓からおぼろな夜明けの光がさしこんでいる。医師は錆びた蛇口で手を洗っている。ザ・ハンドは一本うっている。ロバーツはコーヒーをいれている。そして患者を担架に乗せて、野菜の屋台や買い物客の間をぬけ、トンネルが水浸しになって運河になった、もっと低い層に運ぶ。患者はゴンドラに積みこまれる。かいを握るロバーツとビリーは「サンタ・ルチア」をかなりたてる。ボートが係留された地下鉄駅を通過。早朝の買い物客が、灯りの暗い屋台で魚を選んでいる。患者は自家用救急車に届けられる。運転手が医師に払いをすませると、医師は老いぼれヤク中まがいにもソコソとだらしく、朝影の中に消えてゆく。

「ちょっくら電話を済ませてくる」

\*\*\*\*



再びごったがえしたスラムに戻ったビリー、呑気ルイの店に入る。ここはブレードランナーの溜り場だ。テーブルでロバーツが軽く会釈。ビリーは一人で別のテーブルに座る。ウェイターが、かれにメッセージを手渡す。

医師とビリー、古いホテルの階段をのぼる。最上階の18号室。部屋に入る二人。ビリー、鼻をクンクンさせる。ベッドの上に、真紅の斑点ができた少年。そのガールフレンドがマンガを読んでいる。医師は、あくびをしながら通りいっぺんの診察をする。抗生物質を多少おく。医師とビリーは立ち去る……。

階段でビリーが尋ねる。「あれ、なんだい、ドク？」

「見たとこ、猩紅熱らしいが」

「あの部屋、変な匂いがしてたけど」

「ほう、まあ、香でもたいてたんじゃないの」

「あいつ、病気のロボットみたいに匂ってたよ。なんか腐ったみたいなオゾン臭」

「お前、犬みてえに鼻がききやがるな」

二人は中国人肉屋の前に立っている。ウィンドーには加工済みの犬が鉤からぶらさがっている。医師はポケットを探っている。若いライ病患者が、鐘を縫いつけた中世風レザージャケットを着て、垢まみれの帽子をまわす。医師はそいつを見もせずにコインを入れる。かれは住所を見つける。

上の階。中国人の少年、同じ症状、同じ真紅の斑点。同じ匂い。今度は医師もその匂いに気がつく……。

通りに出たとき、ビリーがあたりを見回す……。

「ドク、逃げろ！ 罨だ！」

地下鉄の駅から警察が現れる。医師は脇道を駆けぬけて逃げおおせる。ビリー、医師のかばんをマンホールに投げこむが、そこを登って来つつあったオマワリがキャッチ。ビリーはセンター・ストリート百番の警察本庁で調書を取られる。薄汚れた取調室にすわり、前の机には医師のかばん。うんざりした様子のマッポ……

「こいつはごみバケツで拾ったんだとよ」

「そうだよ」とビリー。

「そうだよ、だとよ」

「それといっしょにいた医者だが……」

「どうせ見たこともないんだろ」

「そうだよ」とビリー。

マッポの一人が電話をかける。ビリー、まどろむ……。

呑気レイの店に戻って、電話をかけている。混雑したバスと地下鉄。ビリーはへん桃腺手術用の装備と薬を手配。病院で医師と合流。外で自然主義者の暴動。ビリー、医師を手助けして逃がす。台所で手術(「ブレードランナー」の本からの部分)。

別の電話。十六の少年が危篤状態。医師は抗生物質と看護の指示を与える。階段をおりながら医師は言う。「肝臓に関連したはしかだと言いたいところだが、そんなことは有り得ないからなあ……」

通りに踏みだしたとたん……「ドク、逃げろ！ 毘だ！」

医師かばんを持ったビリー、警察につかまる。センター・ストリート百番の警察よりずっと近代的で診察所ふうの部屋にいるビリー。

ビリーが目をさますとそこはセンター・ストリートで、男がブリーフケースを開けている。

「厚生省の者だがね。話す気になったかね？」

「何を？」

「そおおおうだなあ、まずブラッドウェル医師のことなんか……」

「聞いたこともないよ」

「わかった……わかった……」官僚は書類をめくっている。

\*\*\*\*

部屋が変わる。今度の部屋には、大勢の人、電信速報のテープを吐き出し続ける機械、電話、テレビ・モニターなど多数。この連中は高官たちで、退屈して皮肉っぽくなっている。一人はクロスワード・パズルをやっている。二人がコカインをすっている。テレビ・モニターにはブレードランナーたちのヤサのフラッシュ・ショット。ビリー、医師、手術が映る。部屋はブレードランナーのヤサそのままだが、絵や写真の代わりにモニターや機器のパネルやグラフや図表が壁にはりめぐらされている。官僚が書類をめくる。そして壁のグラフを指さす。

「さてこの癌統計を御覧ください。ここに見られるのは、単なる癌の増加ではなく、癌への抵抗力の減退であります……免疫機構が壊れつつあるわけです。癌なりウィルスなりが繁殖するのに多少の時間がかかるのはなぜか？ 免疫のせいです。抗体を取りのぞけば、ウィルスの繁殖過程は加速します。泡沫細胞の癌抗体を殺すか弱めることで、そこを着陸用滑走路として癌菌種が肉体に上陸できるわけで……」

「要するに何が言いたいのかね、B J？」と退屈して爪の甘皮の手入れをしている技官。

「要するにこういうことです。ウィルス繁殖過程は……」甘皮がポロポロ落ち、早回しのあくびやコカイン吸いやクロスワードパズルやレコード……モニターの中でも人が駆けずりまわり、一九二〇年代の早回し追っかけシーンみたい……

「速度を上げます……」モニター上で、男が井戸水を飲み、顔が黄色く、茶色く、緑に、黒になって、死ぬ。

「加速肝炎……」

犬にかまれた人物が、泡を吹いてけいれんしながら倒れる。

「加速狂犬病……」

診察室に患者……「先生、今朝、ちょっとおできがあったもんで」とシャツを脱ぐと、腹に野球のボールほどもある腫瘍が脈うってふくれあがっている……。

「加速癌……」

電話にとびつく医者。「外科をよべ、こんチクショウ……急げ、さもないと防火用の斧で手術するはめになる……」

「紳士諸君、自然は芸術を模倣するものです。加速癌はじきに地球規模で広がるでしょう」

「いつまで隠蔽しておけるかね」

「そう長くは無理です。せいぜい一週間。幾何級数的に拡大していますから。まるで」とボタンを押すと、ものすごい山火事がモニターにあらわれる。

シーン、ビリーに戻る。かれはたばこに火をつけている……。

「よし、釈放だ、ビリー」

ビリー、そこを出て、指令室のモニターに登場。

シーン変わって、別の指令室。ほかの指令室と大差ない。きれぎれの会話から、これがもう片方のチームなのが知れる。

「加速癌は？」

「一番やられ易いのは中間層の、去勢済みの役たたずどもだ」

「あのこすい連中が、みすみすハラキリするとは思えんぞ。なんか匂うな……」

C I Aの部屋に戻る。「癌の本質は、反復にあります 細胞が、古い冗談みたいに繰り返されるわけです。おれは肝臓肝臓肝臓肝臓……そう、半減期五十万年の古い冗談です……」

癌病棟……患者はそれぞれ古い上を冗談を何度も何度も繰り返している。キズの入ったレコードみたいに……。

「ハウレンソウに砂をいれたのは誰だ……ハッハッハッ。ハウレンソウに砂をいれたのは誰だ……ハッハッハッ」

「その牛は絶対に処分するなよ……」

「おれをウマ並みだとも思ってるのかよ」

「いまや値段の点でツメに入っているわけで……」

「おまえの『少々』ってのがどんなもんか、よあーくわかったから、こんどは『たくさん』ってのをツメようじゃねえか……」

「そいつは一本とられた」

「そういうあんたは誰だったんだ？」

「おれの欲しいものはわかるな、さっさと脱いでこっちによこすんだ……」

それぞれが何度も何度も 繰り返されるにつれて腫瘍も成長し、ちぎれて床に落ちる。病室に入ってきた看護婦が絶叫。

指令室へカットバック。「同士諸君、そこらじゅうで噴出しとりますぞ」みんな昆虫のツメでかきむしりあう。

「黒んぼどものせいにしてろ」

「黒んぼがオレたちから噴出しとるぞ！」南部の田舎者やブルーカラーや法律屋が叫ぶ。

「Wir hachten juden aus! (ユダヤが我々から噴出しとっているぞ!)」ナチの指導者が叫ぶ。中国人が肉切り包丁を持って噴出……。

「こんにゃろ、こんにゃろ、こんにゃろ」

癌専門家、腫瘍からの宇宙生命体発生を認める

「宇宙黒んぼ！」

「宇宙白んぼ！」

街角で絶叫する狂乱した人種差別屋。あたりは修羅場で、「勝手に逃げろ」的状況と化している。宇宙生命体なるものは各人ごとに違って見える。要するに、個別の存在というよりは見る側の精神状態、人間の肉体と精神の憑きものなのだ。それがいたるところで憎悪と恐怖と分裂を広げる。

反癌指令室のカット……。

「じゃあ、ウィルスにはウィルスをとってことで……」

ヤサでのシーン。医師が猩紅熱と診断した少年が、熱帯の花のような肉芽を全身に噴いて倒れる。これがウィルスB 2 3、突然変異をおこすウィルスだ。だれも2 3と癌に同時にはかからない。これこそ加速癌に対するワクチンであり、大量に散布されなければならない。ピリーとブレードランナーたちがその任にあたる……。

もう一方のストーリーに戻る。厚生省の役人たちは、これまでのワクチンが効かない天然痘の異常な変種が広まったのによやく気がつく。天然痘にかかった者はH A Aに従わなくても病院で治療が受けられる、というメッセージを伝えるのは、アングラ医療、特にブレードランナーに頼るしかない。

新しいウィルスへの抗生物質がついに開発されるが、まだアングラ市場には出まわっていないのだ。ピリーは肺炎にかかっているが、この話を疑わしそうなディーラーやブレ：

ドラランナーに広めているが、逆に厚生省の手先と思われる。

地下鉄のピリー。運河のおかげで、大深度のトンネルは水びだした。ニューヨークの産物の多くは、ここでは船で運ばれ、アッパー・マンハッタンでは蒸気駆動車や手動車で運ばれる。地下鉄駅は、現在は市場となり、ワイヤーガラスの天窗から淡い灰色の光がさしこみ、それが灯りのないトンネルや運河へと次第に薄れてゆく。灯りはここでは貴重な資源であり、買いためて大事に保管しておくものだ。男が懐中電灯を一瞬つけると、四方から人影が押しよせる。男は銃をぬく。「おれの灯りに近寄るな、このクズども！」

デルコやくざたちは、地下鉄デルコ網から盗んだ電力で海賊電気サービスを売る。やくざ同士は競合していて、やくざ抗争もしょっちゅうだ。ロウアー・マンハッタンに、まったく電力が供給されないときもある。レバー式の手動懐中電灯は貴重な持ち物で、売れば二百ドルにはなる。

ピリー、野菜屋台や花市場をぬって進む。野犬の群れが暗いトンネルからとびだす。ピリー、超音波ピストルで犬どもを幼児なみの臆病さにもどし、しっぽを丸めて小便をかけあっている状態にしてしまう。その横をブレードランナーたちが駆けぬけ、ゴンドラを呼びとめて行き先を告げる。

「こいつは昔、ヘロインを売ってくれたやつだ。今はポップを扱ってると聞いた」

ゴンドラのへ先にアセチレン・ランプ。暗い水の中を、駅からワニがすべるように登場……それにサメのひれも。行く手に灯りが見え、たいまつが自家用棧橋を照らしている。売人は倉庫の壁をぶちぬいて、更衣室や便所をいくつもつなげていた。

かれはひどいイタリア笑いをうかべて、悲しそうにかぶりをふる……。「これがヘロインとかブルーとか、ポップでも何とかするけど……でも23は あれは御免だ。頼むから失せてくれ」

ブレードランナーたち、強引に要求を続ける。かれらは数々の洗練された武器を持っている。犬用に超音波銃や小型火炎放射器、多人数相手の接近戦用にガラスの破片をつめた銃と青酸ナトリウム銃、白兵戦用に消音器つき二十連発釘銃やナイフ、青酸注射器など。



もう一方のストーリーに戻る。刺すような風が冷たく、歯はガチガチ鳴って止まらず、咳のたびに激痛がはしるので、しょっちゅう電柱にもたれて休まなくてはならない。半分は気を失っているし、残り半分も足が地についていない……階段や小道、混雑した街路が焦点を失って次々にぼんやりと通り過ぎてゆく。ある場所では、誰かに階段をつき落とされる。あとで誰かが、暖かくて水っぽいスープを喰わせられ、のどがつまって咳こんでしまう。

狂乱状態の正義漢たちが、カヌーやいかだに首吊り用の輪縄とショットガンを積んで、地下トンネルや沼や運河を徘徊する。また、おそろべきトンネル海賊、抗争中のデルコヤくざ、その他あらゆる地下掃除人がいる。中には這いまわるだけのものもあるが、そいつらとて放射能で輝く四肢の切り口に植えこんだワイヤーカッターでこちらのけんを切断しようとする……他のはひったくりで、こちらの武器とか懐中電灯だとかカメラだとかをつかんで、何年もかけて彫ったトンネルや迷路や隠れ家にサッと飛びこむ。

ビリー、ロバーツ、ザ・ハンドは、今やこの商売で最も危険な仕事にかかっている。弱めたウィルスの形でワクチンを輸送し、それを疫病並の規模で散布する。計算ちがいも多く、ワクチン自体が病気と同じくらいの死亡率を持つこともある。今回、ワクチン開発者は意図的にかなり両者の死亡率を近づけてある。やけになった癌エージェントは、もはやいかなる手を使ってもB23の散布を妨害しようとするだろう。無知でがんこな住民たちは、扇動されて狂乱状態になっている。このワクチンを持っているところをつかまったら、暴徒のリンチにあって恐ろしい死をとげることになる。

B23ウィルスは、生物学的突然変異をもたらすウィルスで、二つの水晶製しゃれこうべに収められて二三、〇〇〇年休止状態にあったが、ドクトル・ウンルー・フォン・シュタインプラッツに再発見された。かれはウンルー病ことUDと呼んでいる。UDの症状



は、まず性器とその周辺に、燃えるようにかゆい発疹ができ、同時にどうしようもない狂おしい性欲がわきおこる。UD犠牲者は、交接中に体色が奇怪な変容をとげ、その変化は遺伝形質として伝えられる。

UDはヘル・ドクトルによって、水晶製しゃれこうべを強磁性鋼鉄ピラミッドの中でDOR 致死性オルゴン放射 にさらすことで抽出された。性交中のカップルにこのエネルギーを当てると、UDの症状が生まれる。UDと癌とに同時にかかることはない。確かにUDの死亡率は高い。特に高齢者や、精神構造が硬直していて変化を嫌うタイプの人間ではそうだ。逆に、物好きな若者はUDを歓迎している。

# ポスターやプラカード

突然変異の自由を  
放射線よりオルゴン・エネルギーを  
癌よりUDを

癌大流行への対抗手段としてUDを大量散布するという決定がマスコミにリークされ、大騒動がもちあがった……リンチ集団、都市炎上……

「おや、まっとうな市民諸君にあれがこんな具合にリークされるはずはないんですが、技術上のトラブルが少々あったようで。例の人工物、つまり水晶製しゃれこうべは二つしかありませんでした。それが現在のゴビ砂漠にあたる地域で二三、〇〇〇年前に作られたウィルスの遺伝子コードを含んでいたわけです。当時、そこには高度な文明が栄えていましたが、このウィルスによって消滅してしまいました。

そこでこのプロジェクトをAチームとBチームにわけました。このAもBも、単独では再生産できないため、感染することはありません。各菌種それぞれはらばのごとくに不妊で、我々の欲しいのは、閃光癌の着陸滑走路となる泡沫細胞を引きつけてしまうような、まったく新種の疫病なんです。二つの菌をいっしょにして、はじめてウィルスは再生産できるようになるし、その任務を果たせるようになります。そこでA菌を持ったAチームとB菌を持ったBチームは、マンハッタンやニューヨーク市中のいたるところで合流しようとして、毎日別の場所で会おうとしている。

リンチ軍団、ニセ警察、本物の警察、公安エージェントと自称エージェント、守護者、民兵、番犬、キリスト軍団兵士は、総出でUDをくいとめようとしている。追跡に狩り出し。全アングラ組織が、A Bのチームを応援している。Aチームは世界貿易センタービルから急降下してきたハングラライダー少年たちに救出される。かれらのビーナス機関銃が種

馬のように気を吐く。

「T Eで会うことに……」

「というとランド・セントラルか 行こう」

はじめは、誰の注意もひかずにすりぬけてゆく。しかしランド・セントラルに近づくにつれて、小商店の集まった地域で、突然みんながこちらに気づく。どっちを向いても、疑わしげな厳しい目がこちらをねめつけて、こちらの後を追い、背後をふさぎ、ブツブツ言いながら行く手にも立ち現れる 地獄の業火のような憎悪をうかべた顔が全方向から包囲をせばめてくる。ほかの連中もその後ろに群がる……。

「このごくつぶしの病気ランナーども……」

「動くんじゃねえぞ……」

「黒んぼの卵でも運んでるのか」

「なにを運ぼうがこっちの勝手だ。どけ」

たくましい肉体労働者がロバーツの正面にふみだし、腰の銃に手をのばす。ロバーツは飛び出しナイフを取り出して、強いバネの力でナイフが筒から男の腹につきささる。男はうめき、体を折って倒れる。ロバーツはナイフを引き抜いて、前後にふりまわす。暴徒の正面にいた連中が仰向けにひっくりかえり、後ろのやつらに折りかさなって倒れる。ショットガンが一発撃たれ、ザ・ハンドの頭の横のウィンドーを粉碎。ザ・ハンドの顔にも赤い点が散る。かれは消音器つき釘銃をぬいて撃つ。プシュッ、プシュッ、プシュッ。ピリーは青酸とガラスの破片ピストルを抜いて、群衆に血路をぶちぬく。ブレードランナーたちはそこを駆けぬける。

もう一方のチームが反対側から接近。暴徒たちは散り散りになって逃げる。両チーム、駆けよる。

「おれはA A A A A !」

「おれはB B B B B !」

\*\*\*\*

今や両チームは同じ役者によって演じられ、着ているのは昔ふうの体育着で、前に「A」

---

「B」と書いてある。抱きあう両者のまわりに雪、紙吹雪、紙テープの霞　　歓声をあげる  
群衆、対日戦勝記念日、欧州戦勝記念日、休戦記念日。駅は時間を逆行している　　—  
九一四年の乗客、長い警笛.....



「ブレードランナー」の本からのシーン：ビリー、銀ドル・バーにて。世紀の変わり目の内装。バーの上の壁には「カスター将軍最後の突撃」の絵。常連たちは一九一四年風の服を着ている。ビリーはロバーツと接触するが、相手は半信半疑。ビリー、天然痘が大流行しつつあると説明。ビリーはウィルスに対する抗生物質を持っている。でも、患者の多くは病院で治療を受ける必要がある。その際、交換条件はいっさい出されない。ビリー、ロバーツに抗生物質の包みを渡す。

自然崇拝者たち 世紀の変わり目のヨタ者か、モルモン教徒を狩りだそうとするリンチ団みたいな格好 がバー沿いに近づいてきて、少年たちをどう猛で下品な目つきでじろじろ見る。中のでかいやつがロバーツの前に立つ。

「ちょっと待った、にいちゃん。包みの中はなんだ？」

「関係ないよ」

「海賊医薬品を抱えたブレードランナーの畜生はみんな関係あるんだ。さ、よこせ」

ロバーツ、男のみぞおちをこぶしで突き、首の横に拳をふりおろす。ロバーツと二人の仲間は出口をめざす。ビリーも戦闘態勢だ。男を一人、サイドステップでかわし、もう一人の鼻ヅラに手刀。ドアとの間にはまだ三人立ちふさがっている。まず一人の足をひっかけ、バーのスツールを支点にして残り二人を飛びこえる。一人が脚を突き出す ビリー、それにつまづいて、倒れながらも仰向けになる（このショットは夢でつまづき、倒れ、ふりむいて追跡者と相対したショットと同じ）。誰かがつかみかかる。ビリー、身をふりほども、セーターを残して、シャツ一枚でドアを走り出る。

世紀の変わり目の街路、路面の穴は凍りつき、空の倉庫、割れた窓、どんづまりに鉄道線路。たくましい自然崇拝者が三人、ビリーを追って、つかまえる。ビリーは足、ひざ、ひじで激しく抵抗。一人がナイフを抜く。古い軍用車のヘッドライト。男たちは逃げ

去る……。

「ビリー、逃げないでいい。私だ。<sup>ドク</sup>医師だ」

ビリーはフラットとなって、うつぶせに倒れる。

目をさますと、そこは病院だ。肺炎と寒さのせいで瀕死だった、と医師に告げられる。ビリーたちブレードランナーは、いまや疫病阻止の英雄だという。

「疫病って？」

「え？ 天然痘だよ、もちろん。もう收拾がついた」

「ドク、今日は何日？」

「一月十八日」

「全部の日付だよ」

「一九一四年一月十八日」

医師は去る。ビリー、窓にいて外を見る。きれいな夜で、マンハッタンのスカイライン上空には星が見える。(このスカイラインは、当時スカイラインを構成していた建築物を調査して用意すること)。最初の夢のシーケンスが反復される。ビリーは包みを腕の下にかかえて、みすばらしい街路を、身を隠しながら走りぬけている。ふきつける雪と、凍るような風のなかで、薄いセーター一枚で、咳こみ、よろけ、戸口で休んで呼吸を整える。地下鉄の改札ごしに犬がうなる。自然崇拝者たちが行く手をさえぎる。バーでのけんかやグランド・セントラルでの騒動。通りまで追ってきた自然崇拝者たちは、医師が一九一四年型の軍用車でかけつけると同時に逃げ散る。後方にもう一方のチームが展開すると同時に散り散りになる、グランド・セントラルの暴徒。雪がかすんで紙吹雪と紙テープにあり、タイムズ・スクエアで群衆が歓声。マンハッタンのスカイラインに、広告看板のネオンがチラチラと動く。

## ブレードランナー

フラッシュバック、病院の窓から見た一九一四年の星空……

## 第II部

### 訳者あとがき





人の期待を裏切るのは気がすまないけれど、本書「映画：ブレードランナー」は、同名の映画とはまったく関係がない。こっちはニューヨーク、向こうはロス。こっちは廃墟、向こうはギンギンに活動中の未来都市。こっちのブレ・ランは医薬品の運び屋、向こうのブレ・ランはアンドロイド狩り。向こうは酸性雨だか何だかが降りしきっているけれど、こっちはいつもお天気（雪はふるけど）。「エンディングのクレジットの中で、リドリー・スコットがバロウズにポイントを置いていた」なんていうウソを平気で言っている文盲ヒョーロンカがどこかにいたけれど、単に「タイトルの使用を快く許可していただいても」というだけのほとんど義務的な表示にすぎなかったのは、ビデオでも確認してみればすぐわかる。「ブレードランナー」という名前にしたってバロウズの発明じゃなくて、かれがアラン・E・ナースの小説から（設定ともども）拝借してきたものなんだ。だから映画のクレジットでは、ウィリアム・バロウズと同じ大きさでアラン・E・ナースの名も並んで出てきている。だいたいあの映画って、確か最後に女と手に手をとって、大自然のなかで未長く幸せに暮らしちゃうとかいうとんでもないオチがついてたんじゃなかったっけ。無能な都会人とアンドロイドのカップルにそんな暮らしができるなら、最初っからウジャウジャ都市になんか住んでるんじゃねーよ。そんな場所があるんなら、とっくにデベロッパーが入って郊外住宅開発されちゃって、川上秀光教授の表現を借りれば「ソフトクリームが溶けるように」都市はスプロールしまくってるはずだぜ。あんな便利な交通機関が普及している時代であればなおさらだ。あのエア・カーみたいなものがあれば、道路開発や公共交通路線整備は要らないし、と。そこらへん、原作の「アンドロ羊」のほうがよくディテールをおさえていたっけ。核戦争後なんていう陳腐な設定だったにしてもさ。

ややっ、つい自分の専門の話になると長くなってしまふ。とにかく、映画とこれ（これも一応映画ではあるんだけど）とは全然ちがう、ということだけは、買う前に肝に命じておいてほしい。なぜちがうのかは、もっぱらリドリー・スコットの問題である。

じゃあこいつはなんなのか、ということだけれど、こいつは非常に簡潔に書かれた、

ニューヨーク市マンハッタンを舞台にした都市小説である。全域がギリギリ歩ける範囲内にあるあの街の広がりや、うまく文章化した小説はなかなかない。「ブレードランナー」は、廃墟と化したマンハッタンにブレードランナーや暴徒を放つことで、うまくこの肉体的な距離感をつくりあげている。まあ、正確に言えば小説ではなくて映画の脚本と小説の間みたいなものだけど。そういえば、デビッド・クローネンバーグがバロウズ作品を映画化するのしないのいう話をしょっちゅう耳にするが、これなんか、ここまで脚本ができていたんだから、そのまま映画化すればいいのに。なかで加速癌が肉塊になってぼたぼた床に落ちるシーンなんて、ほとんど「ブルード」そのものだもの。もっともクローネンバーグはどうしても女を出したがるだろうけど。なお、本書以外のバロウズの映画脚本としては、他に「ダッチ・シュルツ最後の言葉」がある。

さて都市小説は、その都市をからだで熟知している人以外は、ちゃんと地図を横において読むのが唯一の正しい読み方なのだが、ものぐさな読者諸氏がそんな手間をかけるはずもないので、主要ポイントをマークした地図を添えておいた。感謝して、ちゃんと使うように。

つまらない雑知識をひけらかしておく。冒頭近くでガンの治療法としてあげられているラエトリルとは、あんずの種からつくるインチキ薬。ライヒのオルゴン集積器というのは中に金属を張っただけの木の箱である。オルゴンとはなんだかよくわからないエネルギーで、エクスタシー時に人から放出され、こいつを浴びるとガンも治ると称するしろものだ。バロウズ氏はこいつがお好きで、自宅にこのオルゴン集積器をすえつけて、ことあるごとに中に入っては「ワッハッハ、若がえる若がえる」と悦に入っているそう。また、手術のシーンに出てくるエングラムとは、無意識のうちに聞いたことばによって生じるトラウマだと思えばよい。最近日本でも布教のはじまったアメリカ産新興宗教ダイアナティックス（またの名をサイエントロジー）で重要視されている概念らしい。このダイアナティックスとは、要するに家元制をとりいれた通俗精神分析。ちょっと修業して金を家元に払えば、師範代、師範、名取とだんだんカウンセラーとしての地位は向上して、あとは弟子集めに精を出して、上納金をあつめて上前をはねていけばよいというシステムだと聞く。

マンハッタンの雰囲気をつかむ上で、とって役にたったのが、ちょうど研究室の仲間と行っていたマンハッタン・ミッドタウン・ゾーニングに関する輪講であった。参加者の

出口敦、野澤康、三島伸雄、李政炯、黄左紅、前田英寿、宮本周治、川村謙一の諸氏に感謝する。その輪講の総監督であらせられる渡辺定夫教授にはもっと感謝する。さらに、研究室の陰の支配者を公然と名乗る山下節子氏には、感謝しておかないとあとがこわい。

そしてもちろん、質問に迅速な解答をよせてくださったジェイムズ・グラウアーホルツ氏、編集担当の川合健一氏には、毎度ながら伏して感謝を捧げる。

山形浩生<sup>\*1</sup>

---

<sup>\*1</sup> hiyori13@alum.mit.edu

# YAMAGATA Hiroo: The Official Page

(To everybody's horror, there actually **IS** an [un-official one](#)... My Gods, what is this world coming to?!?!)

---

## Before you proceed....

Let's get this straight. I have nothing to do with that artist who makes those icky depthless poster-paintings.

Got that? OK, make your pick.

[English](#) / [Japanese](#)

---



burn all GIFs

Download PGP

[My pgp keys.](#)

---

YAMAGATA Hiroo (hiyori13@alum.mit.edu)